

WCRP

World Conference of Religions for Peace Japan

11
2022
November
No. 517



天日干しの稲をネットにバレーボール（青年部会で参加した「稲刈りカップ」にて）

こころの扉——「smile to myself, smiles to others」 戸松義晴	2
ウクライナ難民人道支援ボランティア 第4次隊レポート	3~4
核兵器廃絶に向けたオンライン学習会開催	5
平和研究所 第5回研究会／第6回研究会	6
アジア太平洋女性信仰者ネットワーク主催 人身取引防止のためのセミナー	7
気仙沼市「稲刈りカップ」・鎮魂の祈り	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



「smile to myself, smiles to others」

この度、世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会の理事長に就任いたしました。

WCRP日本委員会は、1970年の第1回世界宗教者平和会議を受け入れた日本宗教連盟の国際問題委員会を母体として設立されました。日本の宗教界が一丸となって、国際平和の実現と地球的諸課題の解決を目指し、また、国内の災害被災者支援などの緊急支援や継続的支援など、いのちの大切さと人間の尊厳を第一とした課題にも取り組んでいます。

世界経済がウイズ・コロナの段階に入ったものの、現在

会長院職
委員 光
理事 宗心
住 浄土

戸松義晴



のロシアによるウクライナへの軍事進攻をはじめ、世界各地で起きている紛争等の影響による物価上昇や気候変動が起因となり、食料危機などで多くの人々が苦しみ、不安の中で生活しています。

このような危機的な状況の中で、世界の宗教者が一堂に会して祈り、その平和への強い思いを具体的な形にするために、被災者支援、和解、核廃絶や気候変動、人身取引防止など、タスクフォースを立ち上げて協働し活動を推進しています。その小さな積み重ねは社会に変化をもたらし、世界平和が実現されると信じています。私たち宗教者と

って、平和を願い、その理念を共有してそのために何ができるのかを思考し、「思いを形に」することが大切です。

しかし、多様な教義をルーツとする宗教者が協働するときには困難もあります。ある教えに救われた人が、他の人にも救われてほしいと思つてその教えを勧めることや、教義が相反することも宗教の特質としては少なくありません。仏教では全てものは相対的に存在していると説かれています。他の宗教も仏教と同じように、教義があり、正当性があるのですから、それに優劣をつけず、互いにあるのままに受け入れて協力していく。それは、どの宗教も戦争のない平和で穏やかな生活を願っているからです。認めるといふことは、相手を知ることから始まります。

WCRPでは、諸宗教間対話によって互いを知る時間を大切に行っています。2022年9月下旬にウクライナやロシア、世界の紛争地域の宗教者が集まり、第1回東京平和円卓会議が行われました。日本委員会の理事長として私も国際会議に出席し、実際に顔を合わせて語り合うということが、改めて互いを知るためにも重要なことだと実感しました。会って、相手の文化を知り、思いを知る。そうして交流した他者とはご縁によって結ばれ、「あの人はどうしているのだろうか」という思いが、平和への協働を進める行動原理となると感じました。

私のモットーは、どんなに難しい議題の場でも笑顔でいることです。それは、平和への第一歩は「笑顔」だと思っております。「smile to myself, smiles to others」というとおり、ありのままの自分を受け入れ、自分に対して微笑みかけることができる人が他の人に心から微笑みかけることは難しいものです。世界の人々が笑顔で日々の生活を送ることができれば、そんな平和な世界の実現を願っています。

ウクライナ難民人道支援ボランティア

第4次隊レポート

安勝熙(WCRPP日本委員会平和推進部長)
橋本高志(WCRPP日本委員会平和推進副部長)

WCRPP日本委員会は、ウクライナ難民人道支援ボランティアの第4次隊を10月2日から10月16日まで派遣した。

第4次隊は、第1〜3次隊の活動を受けてワルシャワ郊外にあるカトリック在家運動体であるフォコラーレ運動が運営するマリアポリ・フィオーレでのボランティア活動を中心に、ワルシャワでは、カリタスポーランドの託児所でのワークショップ、ワルシャワ中央駅ボランティアセンターへの物資支援、難民センターの視察を行い、クラクフでは、平和構築や紛争和解の取り組みを行う非営利組織で難民受け入れセンターを運営しているサラーム・ラボ（平和ラボ）でのワークショップやボランティアセンターへの物資支援等を行った。

メンバーは、安勝熙・橋本高志（WCRPP日本委員会）、郷原一彰（立正佼成会職員）、橋本欽央（立正佼成



カリタスポーランド前で

会）、グツビニ由香理（立正佼成会）、清水佑季子（立正佼成会）、田中宏昌（立正佼成会）、田中啓仁（立正佼成会）の8人であった。

○カリタスポーランド



託児所でのワークショップ

ウクライナ避難民の登録や情報提供などのサポートを行っているカリタスポーランドでは、事務所の隣に託児所を運営しており、母親が事務所で手続きや情報を得る間に子どもを預けることができる。託児所は子どもの遊び場でもあり、母親同士の情報共有の場でもある。子ども達向けに折り紙や塗り絵、バルーンアートなどを行い、母親からは状況を聞かせてもらおうとともに、日本からの応援メッセージを伝えることができた。

○ワルシャワ中央駅ボランティアセンター

ウクライナ難民の方へ情報提供や物資支援を行っているボランティアセンター



支援物資の買い出し

へ第3次隊に引き続き、物資支援を行った。今回は事前調整の上で訪問、パンや子ども用の飲み物、連絡に欠かせない携帯電話の充電器などの支援を行った。

○マリアポリ・フィオーレ

第1〜3次隊に続き、ウクライナの方々や周辺に住む方々と夕食会を通しての交流を行った。日本文化紹介ではお茶やお菓子を配りながらの交流の時間をもつなど、情緒的ボランティアと、第2次隊から始めていたウクライナの方々のための薪小屋建設などの作業ボランティアを行った。さらに、ウクライナの子も達が9月から地域のポーランドの学校に通い始めており、マリアポリ・フィオーレの担当者の提案でその学校を会場に、ポーランドとウクライナの子も達を対象に書道、折り紙・塗り絵、日本の遊び、バルーンアートの4つのセッションに分かれてワークショップを開催した。校長先生を始めとする



学校でのワークショップ



子どもたち、先生たちと一緒に

教員の方々はもちろん、子ども達が大変喜んでくれて、ボランティアを行って、いる私たちがたくさん元気をもらった。さらに、ウクライナの方々のお宅へ招待され、夕食をとるにもする時間を頂き、信頼関係を深める交流を重ねることができた。同じ食卓を囲んでの夕食会では、自己紹介や趣味の話に加え、ロシアの侵攻が始まった時の驚きや、当初は2〜3日で自宅に帰れると思っていたことなど話していただき心に響いた。

○サラーム・ラボ（平和ラボ）

10月10日、クラクフのNGO団体であるサラーム・ラボ（平和ラボ）にてワークショップを行った。サラーム・ラボは、様々な団体が最大35人程度のワークショップができるよう場所を提供し、5万人のウクライナ難民や地域住民へ声掛けをしている。当初、ウクライナ難民対象のワークショップ

プの開催を依頼したところ、ウクライナ難民だけではなく周辺地域の住民も対象に入れてもらいたいと返答があった。ウクライナ難民が孤立せず、コミュニティに馴染んでもらいたいとのこと。難民支援が物資などの緊急支援や住居や仕事探しの支援から、現地コミュニティとの融和の支援へ変化していることを感じた。

ヨガ、書道、折り紙、バルーンアートのワークショップをそれぞれ1時間ずつ行った。それぞれ約20人の成年女性や子どもたちが参加したが、日中、子どもたちは学校へ通っているため、参加者の大半は成年女性であった。ヨガでは参加者からリラックスしたいとのこと、心の癒しを求めていることを感じた。書道では、参加者の名前をカタカナで書いた。自分の名前以外にも子どもや離れてしまった友人の名前を書く



参加者もいた。折り紙、バルーンアートでは、子どもと大人が参加し、楽しい時間を過ごした。

活動した10日は、ロシアによるウクライナ全土への爆撃があり、ウクライナの方々の心情から参加人数が減るかもしれない、との助言もあった。休憩時間にウクライナ難民同士が抱き合う光景も見られ、お互いを励まし癒す空間となった。

○ブルードット・ユダヤ人コミュニティセンター



クラクフ駅構内でUNHCRとUNICEFがウクライナ難民のために無料で食べ物や飲み物を提供している。支援物資が少なくなってきたため、子ども用の

ゼリーやお菓子を購入し物資の支援を行った。また、サラーム・ラボからの紹介で、ウクライナ難民支援を行っているユダヤ人コミュニティセンターで聞き取り調査を行った。子ども用の紙おむつや飲食物などの物資が足りなくなってきたらと伺った。今後の支援を検討していきたい。



11月29日に開催されたオンライン学習会

核兵器廃絶に向けたオンライン学習会開催 「核に依存しない世界をめざして―宗教対話・協力による新たな貢献―」

ストップ！核依存タスクフォース主催によるオンライン学習会が10月29日、「核に依存しない世界をめざして―宗教対話・協力による新たな貢献―」をテーマに開催され、約100人が参加した。

はじめに、波田スエ子氏（立正佼成会広島教会会員）が被爆証言に立ち、当時8歳の波田氏が爆心地から800メートルの自宅で被爆し、家族全員を亡くした壮絶な記憶を涙ながらに

語った。

続いて、WCRP日本委員会に寄せられた都内の国立大学付属中学校の一年生からのメッセージを山越教雄WCRP同事務次長が紹介。これは、核廃絶に向けた行動をレポートにまとめ、その声を届けるべく、核兵

器廃絶の活動をしているWCRP日本委員会にアプローチしてきたもの。参加者らがその声に耳を傾けた。

『宗教が持つ可能性』のセッションでは、ベアトリス・フィン氏（核兵器廃絶国際キャンペーンⅡ ICANⅡ事務局長）のビデオメッセージが披露され、宗教団体や宗教指導者に対して、①核兵器禁止条約を普遍的な条約にするために、市民社会に訴え、政府に署名と批准を求める上で効果的な力となり得る②核兵器の非合法化に道徳的権限が有効的である③核兵器の使用や実験による被害者支援や環境修復が行える――などの期待を述べた。

次に、鈴木馨祐氏（衆議院委員／核軍縮不拡散議員連盟Ⅱ P N N DⅡ日本事務局長）が発題。鈴木氏は、国民の生命と財産を守ることが国会議員の役割であると語り、日本周辺をとりまく地域の安全保障を無視することではない、宗教者は核兵器保有国の人びとに発信し、「草の根から核廃絶の運動を強化していただきたい」と述べた。さらに、尾崎元氏（共同通信社「メディア戦略情報」編集長）が発題。尾崎氏は、宗教指導者にはリアルポリティクスの理屈に惑わされたり、忖度したりすることなく、良心に基づいて愚直に核廃絶を訴えて欲しいと訴え、宗教界から優れたコンテンツの発信力とその量を増やしていただき

たいと期待の言葉を述べた。

次の『宗教者による発信』では、まず光延一郎氏（日本カトリック中央協議会社会司教委員会顧問／上智大学神学部教授）が発題。光延氏は、ローマ教皇フランシスコによる核兵器禁止条約第1回締約国会議や、核兵器の不拡散に関する条約（NPT）再検討会議に向けたメッセージを紹介した。また、核廃絶は複雑な問題が絡むが対話が必要であり、核保有国である米国の司教協議会が核廃絶は単なる理想ではなく、現実的な政治目標であるとしたことは、大きな勇気を与えるものであることを強調した。

続けて、小林祖承氏（天台宗参務／総務部長）が発題。小林氏は、祈りのエネルギーはごく小さくとも、確かに存在するものであると信じ、平和を求める多くのエネルギーを結集させ、核兵器の誘惑にとらわれてしまった指導者たちに届けたいと語り、宗教および宗教者によって、反核意識が確認され、無条件で核廃絶の機運醸成が図られるべきだと結んだ。

最後に、徳増公明氏（日本ムスリム協会前会長）が発題。あらゆる命を尊ぶ意味で、宗教指導者として人びとの良心を呼び起す任務を遂行することが必要であると述べ、為政者に進言し、共に行動する必要があると語った。

平和研究所 第5回研究会

森伸生所員

平和研究所の第5回研究会は9月27日、オンラインで開催され、森伸生所員（拓殖大学イスラーム研究所所長）が『イスラームの倫理道德規範に想う』をテーマに発表した。

まず、「倫理道德は人類の叡智であり、叡智は人類が築き重ねてきた文化の一端と言える」とテーマ設定の趣旨を説明。続けて、理論物理学者のA・アインシュタインと心理学者のS・フロイトの往復書簡（『ひとはなぜ戦争をするのか』浅見昇吾訳／講談社学術文庫）の内容を引用しながら文化力の重要性について詳述した。

アインシュタインの「人間を戦争というくさびから解き放つことはできるのか」「人間を憎悪と破壊という心の病いに冒されるようにすることはできるのか」という問いに、フロイトは「人間から攻撃的な性質を取り除くことなど、できそうもない」「はるかなる昔から、文化が人類の中に発達し広まってきた。人間の内にある最善のものは、すべて文化の発展があったからこそ」と返答。両者の書簡が「文化の発展を促せば、戦争の終焉に向かっていく」と結論づけたことに森所員は、文化とは人間の価値観を規定するものであり、「そこに重要な存在としての道徳がある。道徳とは『徳』を

実践する道であり、方法であると思う」と文化・道徳の効果を示した。

次いで、キリスト教、イスラームにおける「徳」について言及。とくにイスラームにおける「徳」は「預言者ムハンマドの人格そのもの」と明言し、「ムスリム（イスラーム信徒）は預言者の人格を模範として生きていく。なぜなら預言者はクルアーンの教えを体現した人物だからだ」と語った。

さらに、ムスリムが主な倫理道德規範の概念としているのはシャーリア（イスラーム法）で、それは教義、行為、倫理・道德の三分野である」とし、アッラーの崇拜と親孝行、貧者・困窮者への施し、殺人の禁止などの具体的行動を挙げた。

そして最後に「イスラームの場合、シャーリアの遵守が本来は（個人から集団までの）争いから遠ざかっていくことになるはずだが、シャーリアの体現の難しさがそこにあると思う。それは信仰の弱さからきていると言わざるを得ない。自戒の念を込め、まずは個人の信仰の覚醒から努めなくてはならない」と述べた。

平和研究所 第6回研究会

竹村牧男所長

第6回研究会は10月18日、オンラインで開催され、竹村牧男所長（東洋大学名誉教授）が『仏教における善悪の問題をめぐって――共感・共苦の倫理学を考える』と題して発表した。

はじめに、「仏教の善悪の問題、倫理道德の特徴について考え、またそれが平和を実現することによってどのようなつながり得るのかを考えてみたい」と仏教における行為の分析について語った。その中で、仏教教理では『身・語・意の三業』のすべては意思の心（思の心所）にあり、「仏教は行為というものをも深く見つめ、分析している」と述べ、

『六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）』『四無量心（慈・悲・喜・捨）』『十重戒（殺戒・盜戒・淫戒・妄語戒など）』や、怒りのもとである「随煩惱」の瞋（怒り）、忿（いきどおり）、恨（うらみ）、惱（きつい口撃）、嫉（しつと）、害（攻撃心）などについて詳しく解説した。

次に、善の心の分析として無瞋（怒らず）と不害（思いやり）について語り、「無瞋は他者を殺害しない心であり、不害は他者を損傷しない心である。また無瞋は与楽、不害は抜苦であるという。与楽と抜苦は、慈と悲に相当する。この慈悲の心があれば、他者との争いはなくなるのではないかと参加者に問いかけた。そのうえで、「国家間の関係は個人間、人間間の関係とは同列になり得ないが（中略）、他国の安定・発展に資することが自国の安定・繁栄につながると思われる」と述べた。

アジア太平洋女性信仰者ネットワーク 主催 人身取引防止のためのセミナー

アジア太平洋女性信仰者ネットワーク

(APWOFN)は、9月29日にオンラインで人身取引防止のためのセミナーを開催した。テーマは『アジアにおける人身取引問題に取り組む・課題とベストプラクティス(最善の実践)』。司会を神谷昌道アジア宗教者平和会議(ACRP)シニアアドバイザーが務め、篠原祥哲ACRP事務総長が歓迎あいさつ、河田尚子APWOFN事務局長(WCRP日本委員会女性部会副会長)が開会あいさつを述べた。エルガ・サラブンAPWOFN議長は、「APWOFNは今後5年間、人身取引、気候変動、平和構築の問題を重点的に取り組んでいく。セミナーを契機に人身取引撲滅のための具体的な取り組みを呼び掛けたい」と開催趣旨を説明した。



サラブン議長

セッション1は、

『アジアにおける人身取引問題に取り組むための宗教的視点』がテーマ。ヒンドゥー教からの視点をディーパリ・バーノット博士(ACRP共同会長)、カトリックからの視点をアリソン・ラヒール師(カトリックシドニー大司教区反人身取引タスクフォース

執行役員)が発題し、ハイデイ・ファジャルド師(フィリピン)がモデレーターを務めた。バーノット博士は、「ヒンドゥー教は、人間は物質的なものではなく、尊厳を持った倫理的で霊的なものであると説く。あらゆる人々が平等でかつ尊厳を有しており、尊厳は尊重されなければならぬ」とし、人間を売買し



バーノット博士

奴隷化する人身取引の行為は強く反対するという宗教的視点を強調した。ラヒール師は、第二バチカン公会議(1962年〜65年)で奴隷制度は人間社会の最も悪質な行為の一つであると示されたことなどについて説明した。また、教皇フランシスコの「人身取引なき経済はケアの経済。ケアの経済は労働者をケアし、搾取せず、働く機会を創造するものである」という言葉を引用し、シドニー大司教区の反人身取引タスクフォースの活動を紹介した。



ラヒール師

セッション2では、インドネシア共和国女性支援・児童保護省のビンタン・パスパヨガ大臣による本セミナーに対するビデオ



パスパヨガ大臣

(CJ)のマリー・ギリ・グレン・トゥバス氏が、政府機関と市民社会による人身取引防止、犠牲者保護のための取り組みについて説明し、三善康衣WCRP日本委員会総務部長がモデレーターを務めた。ICJのトゥバス氏は「宗教コミュニティが人身取引の問題で政府機関と連携するのは稀なこと」とし、「宗教コミュニティと政府機関が対話のプラットフォームを構築し、人身取引撲滅のために協働することが必要。このセミナーはその意味で大変重要」と述べた。セッション3では、人身取引犠牲者を保護するインドネシアとフィリピンのシエルターが紹介され、その後、小グループに分かれて意見交換を行った。アジア太平洋諸宗教青年ネットワーク(APIYN)からのコメントの後、APWOFNのスタッフメット・ユニヤシット副議長(タイ)が閉会あいさつに立ち、「道のりは長い、異なるセクターと共に協力して歩めば必ずたどりつける」と述べ、更なる前進を強調した。

メッセージが放映された。

また、インドネシア同省のランタ・スシナワティ次官、国際人権団体インターナショナル・ジャスティス・ミッション(ICJ)

気仙沼市「稲刈りカップ」・鎮魂の祈り

青年部会では、これまでの行事に招いた講師や団体とのつながりを大切に、ネットワーク強化を図っている。その一環として、第9回ACRP大会（昨年10月）に講師として招いた佐藤誠悦氏（元南三陸消防署副署長・東日本大震災語り部）が主催する『東日本大震災復活田11年を繋ぐ2022稲刈りカップ&特別講演&音楽会』に10月8、9の両日、参加した。

宮城県気仙沼市南三陸町で開催された稲刈りカップには、大西英玄副幹事長（音羽山清水寺成就院住職）、眞壁希予幹事（立正佼成会総務部渉外グループ）をはじめ、海外からも多くの参加者が集まった。



祈りを捧げる参加者たち

8日の午前中は、震災から復活させた農地で黄金色に実った稲の収穫を行った。作業が終わると、塩むすびや郷土料理「はつと汁」などが振る舞われた。その後、刈ったばかりの田んぼをコートにしたバレーボールで地元の人たちと親睦を深めた。午後には、特別講演と音楽会が行われ、大西副幹事長も飛び入り参加した。

9日は、佐藤氏の妻・厚子さんが津波の犠牲になった南三陸町の小泉海岸で鎮魂の祈りを捧げた。

被災から11年、佐藤氏は「被災後、初めてご飯が美味しく感じた。初めてお腹の底から笑った」と話した。

今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し新しい熟語を作ります。

良稲（いいね）

気仙沼で参加した稲刈りカップが楽しかった。初めての稲刈りに、田んぼバレー。地元の子供と遊んだり……。地元の日本酒は最高でした。

WCRPの活動

- 《11月》
- 11月13日 和解の教育タスクフォースフォーアップセミナー（熊本・水俣）
- 19日 気候危機タスクフォース「WCRPののちの森プロジェクト」植樹会（埼玉・所沢）
- 25日 和解の教育タスクフォース第3回会合（東京・普門メディアセンター）
- 28日 ストップ！核依存タスクフォース第5回会合
- 29日 平和研究所第7回所員会議・研究会（東京・普門メディアセンター／オンライン併用）
- 30日 人身取引防止タスクフォース第3回会合（東京・普門メディアセンター）

掲載内容の無断転載を禁ず。